



希望創発センター

Center of Education and
Research for Hope-Emergence

2024 年度 希望創発センター 事業報告書

2025 年 5 月

高知大学 希望創発センター

目 次

1. ガバナンス	1
1.1. 教員スタッフ構成	
1.2. 主な委員会等の開催実績	
2. 希望創発研究会	2
2.1. 概要	
2.2. 2024 (R6) 年度取組実績	
2.2.1. 参画者	
2.2.2. 研究会例会の開催実績	
2.2.3. 研究会例会プログラムの構成	
2.2.4. 研究会におけるチーム編成と支援体制	
3. OTOYO事業	6
3.1. 概要	
3.1.1. 目的	
3.1.2. 実績と成果	
3.2. 2024 (R6) 年度活動報告	
3.2.1. 明日の社会の希望をになう人財プログラム	
3.2.2. 東豊永地区希望創発プログラム	
4. 人間関係形成インターンシップ (Society Based Internship ; SBI)	8
4.1. 概要	
4.2. 2024 (R6) 年度活動報告	
5. 戦略的イノベーション創造プログラム (SIP) 事業	9
5.1. 概要	
5.2. 本学の取組	
5.3. 2024 (R6) 年度活動報告	
5.3.1. 「サマセミ型学びの場」	
5.3.2. 養殖コンソーシアム	
5.3.3. その他取組み	
6. その他	11
6.1. 学生自主団体 Seekers の活動実績	
6.1.1. 対話すなっく	
6.1.2. オンライン公民館	
6.1.3. 出前養殖プロジェクト	
6.2. 希望創発センターの活動実績	
6.2.1. パンフレット作成	
6.2.2. 研究成果報告	

参考資料

2024 年 (R6) 年度希望創発研究会 最終報告会資料の要旨集	15
-----------------------------------	----

1. ガバナンス

1.1. 教員スタッフ構成

2024（R6）年度の教員スタッフは以下のとおり。

学外有識者等から『希望創発エコシステムづくり』に関し、意見又は助言を求めることにより、希望創発センターにおける『希望創発エコシステムづくり』を更に推進することを目的として令和4年度からアドバイザリーボードを設置している。

※アド：アドバイザリーボードメンバー



1.2. 主な委員会等の開催実績

2024（R6）年度は、昨年度に引き続き、運営推進委員会を休会とし、センター長、副センター長が主な委員である企画運営室会議においてセンターの運営及び事業全般の審議、報告を行った。また教員会議は、必要に応じて開催した。

会議名	開催実績
運営推進委員会	休会
企画運営室会議	原則月1回のオンライン開催とし、最終的に計12回を開催した。
教員会議	必要に応じて開催した。

2. 希望創発研究会

2.1. 概要

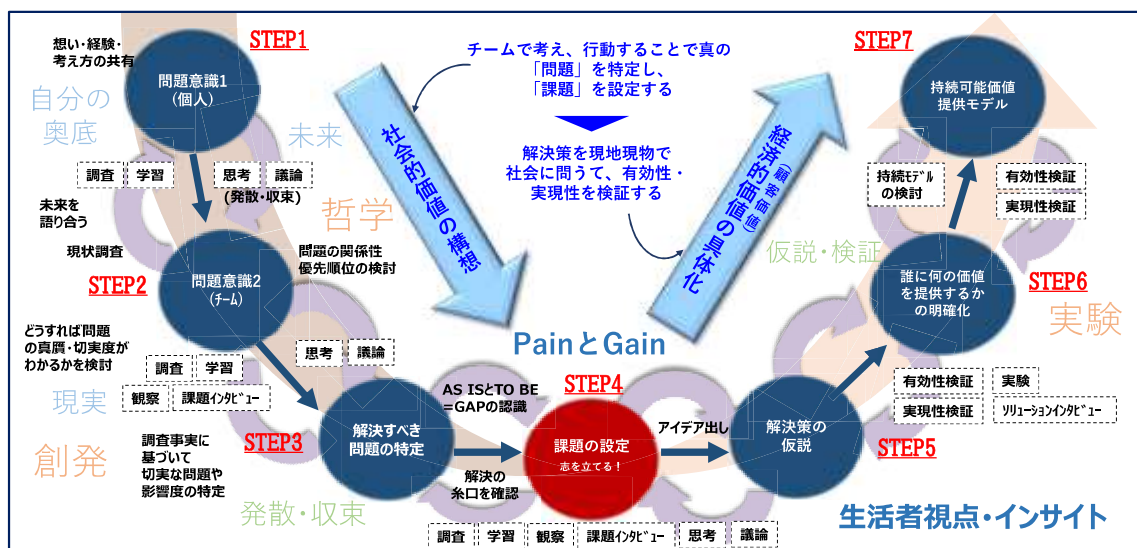
○ 特徴1：思考行動変容支援と知的情報提供のための AOL 型と SOL 型セミナーの実施
月1回(土日)の頻度で開催する研究会は、5～6名の学生と企業人混成チームでテーマの深掘りやソリューション型ではない課題解決の企画立案を目指すことを目的とし、そのために必要な「当たり前を疑う」などの思考行動変容や思考法、およびその整理などを支援する AOL 型と SOL 型のセミナー(※)の実施を柱に、高知での現地調査や研究成果の共有(報告会等)などを行ってきた。

※ 学術志向型学習(AOL; Academic-oriented Learning)：大学が長い歴史の中で蓄積してきた教養教育や専門教育を土台として普遍的な真理や高度に抽象化された概念理解を目指す学び

※ 社会志向型学習(SOL; Social-oriented Learning)：流動的な社会状況において他者と共創する経験に基づいた学習

○ 特徴2：持続可能な価値提供のための価値検討プロセスの展開

希望創発研究会では、営利や非営利を問わず、その目的を実現するための活動の総体を事業と定義し、目指すものは「持続可能な価値提供」である(下図参照)。ただし、目標のゴールは事業化提案にあるが、必須とはしていない。試行錯誤の活動プロセスこそが研究会の目的であり、哲学・創発・志および実直な仮説・検証をないがしろにした、辻褄合わせの結果を求めるものではないからである。



○ 特徴3：目指すべき人財像アプローチの観点からの研究会プログラムの設計

希望創発センターでは、「哲学」と「創発」の習得と実践を通して、参加者の自主性を引き出し、自ら考える力を磨くとともに、事実を多面的にまた深く観察し、視野を広げ真の課題に到達できるように主体性を持って行動できる行動様式を身に付けるプログラムを「目指すべき人財像アプローチ(次頁表1参照)」の観点から設計している。

※目指すべき人財像アプローチ（表1）

目指すべき人財像アプローチ
「なぜ」と考えることが習慣化したか？
「新しいものごと」ではなく、「普遍的なものごと」に目を向けることが出来たか？
他者との関わりによって、自分の特徴や物差しに気づけたか？
まずは「役に立つか？立たないか」の物差しではなく、自分自身の物差しでものごとを捉えることが出来たか？
近視眼的な目的指向に走るのではなく、自由に思考・行動が出来るようになったか？
研究会活動をととして「感覚」や「感情」は揺れ動いたか？
社会に対して、あるいは自分自身に対して、これまでに感じたことがない違和感を持つようになったか？ また、その違和感の正体にアプローチ出来たか？
世界に対する捉え方が以前と変わったと感じられるか？
みんなでやるからこそ、辿り着ける場所があることを実感できたか？
日常を足場として、希望ある未来の創成の一翼を担ってやろうという気持ちが立ち上がって来たか？
自分のフィールドに戻って、これまでと違った目線で物事を見たり感じたりするようになったか？

○ 特徴4：参画者個人の思考行動変容の自覚化に係る支援

希望創発研究会においては、参画者が研究会活動における各自の思考行動変容の自覚化支援として、研究会活動終了時に研究成果に関わる個人論述書や活動のリフレクションレポートの作成を必須化し、これらの資料を参考に、チームのファシリテーションを担当する複数の関係教員（基本：客員と兼務各1名）が個人最終レビューシートを作成し、参画者や派遣企業担当者に対しフィードバックする方法を確立した。

また、R6年度からは心理的資本診断ツール（HEROIC）」（Be&Do 社提供）を活用し、心理的資本の状態を可視化することで、4つの要素（意思と経路の力、自身と信頼の力、乗り越える力、柔軟な楽観力）を測定し、診断結果に基づいたフィードバックを提供している。

2.2. 2024（R6）年度取組実績

2.2.1. 参画者

2024（R6）年度は、対面実施6回、オンライン実施5回の計11回のハイブリッド型で実施を想定し、2022（R5）年度から続く有償での取り組みであるが、参画社員は5地域から7社8名が、学生についても13名（院生5名、学部生8名）の参画を得た。

詳細は、下図のとおり。



2.2.2. 研究会例会の開催実績

2024(R6)年度は、2023 年度と同様に研究会は5月に開始とし、予定どおりハイブリッド型での年11回開催した。

チーム状態目標	開催月	開催日（原則、第2土日）	開催方法	内容
●思考行動の変容 自身の“ありたい姿”を起点にインスピレーションと洞察から未来の社会を創造・発想（未来の推論）し、その実現に向け真剣に考え・行動する準備が整っている。	5月例会	5月11日（土）－12日（日）	オンライン	参画メンバー全員での関係づくり
	6月例会	6月8日（土）－9日（日）	対面	参画メンバー全員で高知を知る
●問題の特定と解決課題の設定 “チームが実現したい世界観”が描けており、その実現に向けた「問い」を立て、解決すべき問題を特定すると共に、それを解決するための課題を設定できている。	7月例会	7月13日（土）－14日（日）	対面	チーム対話：チームプロジェクトの検討
	8月例会	8月24日（土）－25日（日）	オンライン	チーム対話：チームプロジェクトの検討
	9月例会	9月7日（土）－8日（日）	オンライン	チーム対話：チームプロジェクトの検討ー“ビジョン”の決定ー
●解決策の仮説設定と検証実践プロジェクト案策定 現地調査、観察、インタビューなどの現状把握を通して、設定した課題を解決するための仮説が設定され、その検証のための実践プロジェクトが実施されている。	10月例会	10月19日（土）－20日（日）	対面	チーム活動：高知での現地調査＆“潜在的ニーズ”や“カスタマー像”の検討
	11月例会	11月23日（土）－24日（日）	対面	チーム活動：高知での現地調査＆“潜在的ニーズ”や“カスタマー像”の検討
	12月例会	12月14日（土）－15日（日）	オンライン	進捗状況報告会
●解決策の社会活用プロトタイプの設定 実践検証を通して解決策の仮説の有効性や実現性が確認され、その解決策を基にした社会活用プロトタイプが検討されている。	1月例会	1月11日（土）－12日（日）	オンライン	チーム対話：課題解決策の検証
	2月例会	2月8日（土）－9日（日）	対面	チーム活動・対話：高知での現地調査＆課題解決策の検証
	3月例会	3月1日（土）－2日（日）	対面	最終報告会

- ・ 開催期間・回数：2024(R6)年5月～2025(R7)年3月（毎月1回土日開催）・11回開催
- ・ 開催方法
 - * オンライン開催：5回（5月、8月、9月、12月、1月）
 - * 対 面 開 催：6回（6月、7月、10月、11月、2月、3月）

※10月、11月、2月高知県内での現地調査の実施

2.2.3. 研究会例会プログラムの構成

毎月の例会プログラムは、原則、基礎セミナー（2時間程度）及びリフレクションの実施とチーム討議を基本とし、10月～2月の現地調査を踏まえたチームでの討議成果を3月例会において共有（最終報告会）する構成とした。今年度の基礎セミナー及び全体ワークショップの開催実績は以下の一覧表のとおり。

開催月	基礎セミナー・全体ワークショップの実施内容
5月例会	・ 理念醸成セミナー-希望創発センターとは？-（講師：大島俊一郎副センター長） ・ 基礎セミナー「希望創発研究会の進め方～皆で考える題材として～」（講師：中島大輔客員教員） ・ 「創発とは？」（講師：鈴木紀之氏（高知大学）／谷俵太客員教員）
6月例会	・ 超芸術トマソングループ活動（講師：谷俵太客員教員） ・ トマソン形式知化（講師：縣拓充氏（千葉大学）／谷俵太客員教員）
7月例会	・ フィールドに出て行って「高知の希望をみつける！」（講師：谷俵太客員教員）

開催月	基礎セミナー・全体ワークショップの実施内容
8月例会	・基礎セミナー【ワークショップⅠ】身近にある（けど見落としがちな）「問い」に向き合おう！（講師：広石拓司氏（株式会社エンパブリック 代表取締役）） ・基礎セミナー「私にとって大切な問い」をみつけよう！（講師：広石拓司氏（株式会社エンパブリック 代表取締役））
9月例会	・基礎セミナー【ワークショップⅠ】「私の問い」を分かち合い、「10年後の社会に向けての私たちの問い」をつくっていきこう（講師：広石拓司氏（株式会社エンパブリック 代表取締役））
12月例会	・協働セミナー【ワークショップ】ビジネスモデルの視点-持続可能な価値提供の視点から各チームの活動を点検・展望する-（講師：中島大輔客員教員）
1月例会	・基礎セミナー【ワークショップ】「思考と論述のトレーニング」（講師：佐藤智子氏（東北大学）） ・特別協働セミナー「明日からはじめるローカルプロジェクト」（講師：若狭健作氏（株式会社地域環境計画研究所 代表取締役）） （講師：大島俊一郎副センター長）

2.2.4. 研究会におけるチーム編成と支援体制

研究会活動は、7名の学生・企業人混成チームを3チーム編成して行った（詳細は以下の一覧表を参照）。チームには、企業関係教員（客員）と専任・兼務教員各1名を配置し、例会時の対話の場づくりやプロジェクトマネジメントを行ってもらった。

さらにチームメンバーが作成する年間活動リフレクションレポートや個人論述書を踏まえた最終レビューシート作成および自主的なチーム討議やメンバーのキャリア形成に関わる支援も行ってもらった。

なお、検討成果を共有する最終報告会のタイトルは以下の一覧表のとおり。

○ 最終報告会・チームの報告タイトルとメンバー所属先一覧（報告要旨は巻末資料参照）

チーム	タイトル・メンバー	
1	報告タイトル：人の幸せ 地域の幸福	
	参画社員（国立大学法人高知大学） 参画社員（サントリーフーズ株式会社） 参画社員（株式会社高知銀行）	参画学生（理工学部） 参画学生（地域協働学部） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科応用自然科学専攻）
2	報告タイトル：自分らしい幸せを求めるクエスト：多様性を活かす新しい生き方 ～誰もが自分の“幸せのカタチ”を大切にできる未来に向けて～	
	参画社員（旭化成エレクトロニクス株式会社） 参画社員（国立大学法人高知大学） 参画社員（日本電気通信システム株式会社）	参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻） 参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（地域協働学部）
3	報告タイトル：自分探しを実現するサービス「ここたび」について	
	参画社員（日揮株式会社） 参画社員（パナソニック コネクト株式会社）	参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科医学専攻） 参画学生（理工学部）

3. OTOYO事業

3.1. 概要

OTOYO事業は、高知県大豊町東豊永地区をフィールドとした、「東豊永希望創発プログラム」と「明日の社会の希望をになう人財プログラム」の2つからなる。

東豊永は全国的にも過疎・高齢化が顕著な地区ですが、そこに残る文化や風景は、私たちにとって今の日本社会を見つめなおし、これからについて思案するヒントになると考える。

五感を通じて学び、地区や社会の活性に向けて取り組んでゆく。それがOTOYO事業である。

3.1.1. 目的

関係教員の中で大手企業の人事の変革を目指す客員教員と限界集落である大豊町東豊永を再生したい兼務教員の想いが出会い、それらの目的を同時に実現するOTOYOプロジェクトが誕生した。本プロジェクトは、企業の社員ばかりでなくこの社会に暮らし、考えるすべての人々を対象とする「明日の社会の希望をになう人財プログラム（以下、明日の人財プログラム）」と、パラダイム破壊型の限界集落再生を目指す「東豊永地区希望創発プログラム」を融合する事業として展開するものである。



3.1.2. 実績と成果

2024(R6)年度においては、以下の成果（outcome）を得ることができた。

- ・明日の人財プログラムについては、2回実施した。
- ・東豊永地区希望創発プログラムについては、活動拠点のNPOの運営補助を行った。具体的には、子どもが里山の自然に親しむ会および野草に親しむ会・ダンスに親しむ会・シャクヤク植付イベントなどのイベントの実施を行った。
- ・小林製薬(株)との連携推進のための財源としての寄付金(50万円、2024年度分)を得た。活動財源確保のためにいくつかの助成金の申請を行った。そのうち子どもゆめ基金から引き続き助成(2025年度実施)が決定した。
- ・OTOYO事業の取組を通して、小林製薬(株)をはじめ、大豊町、高知県産業振

興課（嶺北担当）、牧野植物園へと連携活動を昨年度から引き続き行った。

3.2. 2024（R6）年度活動報告

3.2.1. 明日の社会の希望をになう人財プログラム

明日の人財プログラムは、リモートで行う第1部と第3部、2泊3日の合宿形式の研修の第2部の3部構成とした。2024年度は下表の日程および内容で2回実施した。第1部は本プログラムの趣旨説明と大豊の概要紹介、第3部は、参加者のキャリアの考察を目的としている。

2024（R6）年度は、以下のスケジュールで行った。

回	日 程	内 容
1	5月31日	明日の人財プログラム第1部（大豊町やプログラムの紹介、チームビルド）
	6月7日～9日	明日の人財プログラム第2部（大豊町東豊永地区の住民との懇談、共同作業などにより、豊かな自然、人柄、生き方、想いに触れることを通じ、自身のなかの本質的な問いに向かい合う。）
	6月15日	明日の人財プログラム第3部（第1部および第2部で養った問題意識を踏まえ、課題の核心を探り当て、今後の思考・行動上の指針を見出す。）
2	10月18日	明日の人財プログラム第1部（大豊町やプログラムの紹介、チームビルド）
	10月25日～27日	明日の人財プログラム第2部（大豊町東豊永地区の住民との懇談、共同作業などにより、豊かな自然、人柄、生き方、想いに触れることを通じ、自身のなかの本質的な問いに向かい合う。）
	11月2日	明日の人財プログラム第3部（第1部および第2部で養った問題意識を踏まえ、課題の核心を探り当て、今後の思考・行動上の指針を見出す。）

3.2.2. 東豊永地区希望創発プログラム

東豊永地区希望創発プログラムが目指す「中山間集落の振興を図るため人の交流を盛んにし東豊永地区の活性化に寄与する」ための拠点の1つとして、地域住民によるNPO法人夢来里の風の運営・支援を行った。

NPO法人夢来里の風の運営・支援に加え、市川部会長及び土居客員教員が既存のNPO法人ぬた守る会や東豊永集落活動センターの会合に参加し、関係者との信頼関係構築に努めた。

本プログラムの取組に際し、企業が注目するCSV（共通価値の創造）を推進していた小林製薬㈱と連携し、連携推進のための寄付（50万円）を得た。活動財源確保のためにいくつかの助成金の申請を行った。そのうち子どもゆめ基金からの助成（2025年度実施）が2024年度に引き続き決定した。

4. 人間関係形成インターンシップ (Society Based Internship ; SBI)

4.1. 概要

人間関係形成インターンシップ (SBI) の基本コンセプトは、(a) 参画するすべての協働者が「本気」で取り組める仕組み、かつ (b) 本気の取組が醸成する相互信頼関係の形成にある。(a), (b) を達成するために、学生の場合、事前セミナーに始まり、3 人一組での 15 日間のインターン、実習終了後の事後セミナーおよび報告会、さらに、その後、半年間に亘って行う月 1 回の振り返りと 6 ヶ月目の再度の報告会を実施する。受け入れ企業の実習支援者 (SV ; スーパーバイザー) については、学生への 15 日間の振り返り (面談) 支援、日報へのコメント記入や報告会への参加などを実施する。なお、両者の本気形成のための支援として学生対象のセミナーと SV 向けの目標設定塾などを実習前・実習後に実施する。

4.2. 2024 (R6) 年度活動報告

第 24 期 (2024 年 5 月～2025 年 3 月に実施) の 6 ヶ月後報告会を 2025 年 3 月 6 日に実施し、8 名に修了証書を授与した。

第 24 期は、以下のスケジュールで行った。

日 程	内 容
2024 年 4 月 15 日～6 月 7 日	学生募集期間
5 月 20 日～24 日, 6 月 3 日～7 日	なんでも相談会
7 月 3 日	マインドアップセミナー (学生対象)
7 月 6 日	チームビルディング&目標設定セミナー① (学生対象)
7 月 20 日	チームビルディング&目標設定セミナー② (学生対象)
7 月 25 日	目標設定塾 (SV 対象) & 顔合わせ (SV 全体対象)
8 月 22 日	マナー研修会 (学生対象)
8 月 26 日～9 月 13 日	実習
9 月 2 日	中間モニタリング
9 月 19 日	事後モニタリング&目標設定総括セミナー (学生対象)
9 月 30 日	目標設定総括塾 (SV 対象) & 振り返り報告会 (全体対象)
12 月	3 カ月後 SV 訪問
2025 年 3 月 6 日	6 カ月報告会

実習先企業は、株式会社高南メディカル・高知機型工業株式会社・有限会社戸田商の 3 社である。参加者は、人文社会科学部 (2 年生 4 名、1 年生 1 名)、理工学部 (3 年生 1 名)、農林海洋科学部 (1 年生 1 名)、地域協働学部 (1 年生 1 名) と様々な学部の学生

に参加してもらうことができた。なお、募集終了時点では9名の参加が確定していたが、マインドアップセミナー直前に体調面での不安を理由に1名が辞退を申し出て、実習先企業の下承も得たうえで、辞退を受け入れた。

二度のチームビルディング&目標設定セミナーでは、チームメンバーが互いを知り、チームの中で自分ができることやメンバーに助けてほしいことを共有した。また、実習中の個人目標、チーム目標などを設定した。これらの情報を顔合わせの時にSVに伝えることで、実習をスムーズに始めることができた。

学部	人文社会科学部			教育学部			理工学部			農林海洋科学部			地域協働学部			計
学年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
第23期		2						2		1				1		6
第24期		4	1						1	1			1			8
小計	0	6	1	0	0	0	0	2	1	2	0	0	1	1	0	14
学部計	7			0			3			2			2			14

実習中の日報・週報では、実習での個々の気づきに加え、振り返りでのチームメンバーやSVの言葉による気づきも多く見られた。また、事前・事後のセミナーの振り返り報告でも、手応えを感じているコメントが多く見られ、全体を通してコンセプト通りの成果が得られていた。

実習後の2024年10月～2025年2月までの期間は、チームメンバーだけで集まり、1カ月をどういう意識で過ごし、次の1カ月はどういう目標を立てて行動するか意見交換する「Tea Time」を実施した。その間の12月には、各チームが3カ月後SV訪問をし、SVへの近況報告とSVからのアドバイスをもらった。これら実習後の活動報告を6ヶ月後報告会で発表してもらった。どの学生もSBIで学んだことを活かして新たな目標を立て、新たな活動へと繋げており、SBIでの学びの定着を感じることができた。

一方、SVに対しても事前の目標設定塾、事後の目標設定総括塾を実施し、2024年10月28日に開催した実習先企業との談話会では、中間モニタリングや事後セミナーでの意見交換の場において、他社のSVと学生の関わり方やプログラム運営方法について情報交換を行えたことでも新しい気づきがあった等、SVの成長につながるプログラムだったと評価された。

5. 戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)事業

5.1. 概要

戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)とは、内閣府総合科学技術・イノベーション会議(CSTI)が、司令塔機能を発揮し、府省の枠や旧来の分野を超えたマネジメントにより、科学技術イノベーション実現のために創設した国家プロジェクトである。

これまで、第1期(2014～2018年度)11課題、第2期(2018～2022年度)12課題に取り組み、2023年度からはじまった第3期(2023～2027年度)14課題では、技術だけでなく、制度、事業、社会的受容性、人材の5つの視点から必要な取組を推進し、基礎研究から社会実装まで一貫通貫で研究開発を推進している。

5.2. 本学の取組

戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）第3期研究課題「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」に大島俊一郎希望創発センター副センター長の「主体性を醸成する生涯学習プラットフォームの構築と「知」の総合化」が採択され、共同研究開発機関である東北大学、千葉大学と共に研究開発を行っている。

具体的には複数の大学・自治体・企業等において、「サマセミ型の学びの場」を企画・実践するために、それぞれの実行委員会を立ち上げる。また、D&Iの視点から、「新たな『学び』や新たな働き方を大学や企業に導入するための条件を明らかにするために、高知大学や東北大学でこれまで開催してきた「哲学カフェ」や「オンライン公民館」といった各種イベントを継続的に開催する。さらに、「サマセミ型の学びの場」の一環として、小学校、民間企業、大学が協同して主体性を醸成する学びの機会を「食育：出前養殖プロジェクト」を通じてつくる。

Society 5.0を生きる社会人に必要なリカレント・リスキリングの具体的なコンテンツを特定・開発し、その有効性を実証するために、まず、今年度立ち上げた養殖コンソーシアムで挙げられた研究課題について研究開発を行う。

5.3. 2024（R6）年度活動報告

5.3.1. 「サマセミ型学びの場」

「地域でのサマセミ型学びの場」では、室戸市で8月18日（日）に「おらんくの室戸大学 サマーセミナー」を開催（46コマ開講）、2025年2月22日（土）には「おらんくの室戸大学サマーセミナー吉良川セミナー（キラセミ）」を開催（14コマ開講）した。いの町では8月24日（土）「おらんくのサマーセミナー」が開催（21コマ開講）された。

「サマーセミナー」とは、誰でもセンセイ誰でもセイトを合言葉に、社会教育の一環として、地域の人々が主体的に学び、学びの楽しさを実感し、地域のことをよく知り繋がる機会（自治）を共に創造することを目的として開催している。

上記に加え、高知県長岡郡大豊町、北海道伊達市での「サマーセミナー」開催に向け準備を進めている。

「大学でのサマセミ型学びの場」では、高知大学初開催となる「おらんくのサマーセミナーin 高知大学」が2025年2月7日（金）高知大学朝倉キャンパスにて開催（12コマ開講）された。

学生だけでなく、教職員、一般（地域）の方の参加もあり、「サマセミ型学びの場」で出会った様々な人たちと繋がることで多様な連携が生成され、他のイベントにおいても「学びの楽しさ」を他者に提供でき、主体性の醸成が確認された。

さらに、後述のSeekersの活動のとおり、高知大学・東北大学・千葉大学と連携して「哲学カフェ」や「オンライン公民館」などの協同学習を行った。その結果、オンラインを通じて、地域の方々や地域の文化、これまでの経験が異なる人たちと対話することで、新たな気づきが生まれ、それぞれの参加者にとって刺激的な学びとなった。この出

会いから、「まずは行動してみることの楽しさ」や「大人はもっと頑張らないといけない」といった参加者からの声もあり、主体性の醸成が確認できるような意見が数多くあった。

5.3.2. 養殖コンソーシアム

高知大学を中心に、2023（R5）年度計8社（日揮株式会社、旭化成株式会社、株式会社ビズジーン、株式会社ダイセル、栗田工業株式会社、協和キリン株式会社、鴻池運輸株式会社、セリオ株式会社）の企業と連携して立ち上げた「養殖コンソーシアム」では、産業チェーンを意識して、生産、流通、販売、医療、化学、ITならびにエネルギー関係の事業を行っている企業に参画していただいている。

ここでは、生活者として参画していただくことを重要視しており、経済原理だけで繋がりがちな現状の課題（効率化による思考、行動の画一化）に対して、この関係性を人と人の関係性に繋ぎ変え、思考、行動の変容を図ることで、イノベティブな発想を生み出し、かつ生まれた発想を参画者で協働し、迅速に社会実装に繋がるものやことにつくり上げる仕組みを立ち上げた。2024（R6）年度は2社（江南化工株式会社、池田糖化工業株式会社）の新規参画企業を加え、全4回の定例会議を開催し、挙げられた研究課題について研究開発を継続的に進め、社会実装を目指している。

5.3.3. その他取組み

2025年2月23日（日）OMO7高知 by 星野リゾート（高知市九反田）にて、共同研究機関である東北大学、千葉大学に共催いただき、高知大学SIPシンポジウム「Society5.0における生涯学習」を開催した。

2023（R5）年度採択後、初めてとなるシンポジウムは、我々の取組みの1つである「誰でもセンセイ、誰でもセイト」をコンセプトとした「サマセミ型学びの場」の実証研究について、研究紹介及び得られた成果を発信し、60名以上の参加があった。

また、シンポジウム前日（2025年2月22日）に開催された「おらんくの室戸大学サマーセミナー 吉良川セミナー（キラセミ）」にも合わせてご参加いただき、様々な関係者に「サマセミ型学びの場」を体感いただいた。

6. その他

6.1. 学生自主団体 Seekers の活動実績

2024年度のSeekersでは、「対話すなっく」、「オンライン公民館」および「出前養殖プロジェクト」を実施してきた。

6.1.1. 対話すなっく

全国的に行われている「哲学カフェ」のことであり、日頃気にもとめない当たり前なことについて語り合う場所である。今年度は、高知大学の大学生同士で計4回、東北大学、千葉大学の学生および社会人と一緒に計8回実施した。両大学の学生に加えて、社

会人（企業）も参加することにより、学生と社会人の共創的な学びの場となった。

6.1.2. オンライン公民館

オンライン公民館は、隔月のペースで開催し、センセイには研究会関係者や Seekers、高知大学生から希望者を募る形で次の表のとおり実施した。

開催回	開催日	タイトル	担当者
第1回	2024 年 5 月 20 日	僕の生き方	玉井 綜真
		TOEIC スコア推定 350 点が語る、海外へ行きたくなる話し。	芦田 知輝
第2回	6 月 18 日	TOEIC スコア推定 350 点が語る、海外へ行きたくなる話し。	芦田 知輝
		誰も知らないカエルの世界	市川 空
第3回	7 月 31 日	ももクロから学ぶ生き方と地域活性化	糸林 建貴
		恐竜を飼育しよう！	森本 瑛智
第4回	9 月 27 日	音楽の正しい使い方	関口 京生
		多忙な谷脇めぶきって何してるの？	谷脇 めぶき
第5回	2025 年 1 月 9 日	自治寮の実態を知る	田中 喬
		ウミガメ大学 離島キャンパス	山口 永晏

6.1.3. 出前養殖プロジェクト

「出前養殖プロジェクト」の企画内容は、主に、ブリ、マダイおよびヒラメの稚魚を学習者が飼育する体験型学びを提供するものである。

1 日 2 回の餌やりと水温の確認を毎日実施してもらい、最終日には出前授業（飼育体験した同魚種を給食として提供）を実施し、魚という命を我々人間はいただいて生きていることを体験してもらった。

2024（R6）年度の開催実績は以下一覧表のとおり。

開催日	対 象	実施内容
6 月 19 日～7 月 3 日	桜井幼稚園	養殖魚飼育、出前授業
7 月 8 日～7 月 18 日	芸術学園幼稚園	養殖魚飼育、出前授業
9 月 6 日～9 月 20 日	東京都立羽村特別支援学校	養殖魚飼育、出前授業
11 月 12 日～11 月 25 日	芸西幼稚園	養殖魚飼育、出前授業
12 月 7 日	桜井幼稚園	移動水族館
	高知大学教育学部附属幼稚園	移動水族館
2025 年 1 月 13 日	こうち環境フェア	移動水族館
2025 年 2 月 26 日	桜井幼稚園・芸術学園幼稚園	養殖場中継

このプロジェクトの結果、生徒が普段食べている魚を飼育することで、「命」の重要性や「食」へのありがたみを、実感を伴って再認識してもらうことができた。

また、魚の飼育を通じて、理科や社会といった普段の授業との繋がりが実感でき、面白くなったという生徒や大学に対し、興味をもった生徒が複数人確認された。

6.2. 希望創発センターの活動実績

6.2.1. パンフレット作成

2024年度、希望創発センターでは、パンフレットを新たに作成した。

「未来を本気で考える」をコンセプトとし、次の時代を支える人々に希望ある未来を託していくために、「これからの未来を、私たちはどう生きるべきか？」という『問い』を、謙虚に、真剣に誠実に、逡巡を重ねていきたいと思う。センターの特徴的な4つの事業を紹介する。



6.2.2. 研究成果報告

2024年9月28日（土）高知市文化プラザかるぽーと大ホール（高知市九反田）にて開催された高知大学創立75周年研究成果報告シンポジウム「未来研究ミュージアム～冒険の扉をひらこう～」において、ポスター発表を行った。

当日は、大学教職員等の関係者をはじめ、高知県内の中高生並びに保護者等、たくさんの方々が訪れ、センターの取り組みを広く発信する良い機会となった。



参考資料

2024（R6）年度希望創発研究会 最終報告会資料の要旨集

最終報告会・チームの報告タイトルとメンバー所属先一覧

チーム	タイトル・メンバー	
1	報告タイトル： 人の幸せ 地域の幸福	
	参画社員（国立大学法人高知大学） 参画社員（サントリーフーズ株式会社） 参画社員（株式会社高知銀行）	参画学生（理工学部） 参画学生（地域協働学部） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科応用自然科学専攻）
2	報告タイトル： 自分らしい幸せを求めるクエスト：多様性を活かす新しい生き方 ～誰もが自分の“幸せのカタチ”を大切にできる未来に向けて～	
	参画社員（旭化成エレクトロニクス株式会社） 参画社員（日本電気通信システム株式会社） 参画社員（国立大学法人高知大学）	参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻） 参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（地域協働学部）
3	報告タイトル： 自分探しを実現するサービス「ここたび」について	
	参画社員（日揮株式会社） 参画社員（パナソニック コネクト株式会社）	参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科医学専攻） 参画学生（理工学部）

「チーム論述書」

チーム番号 (1)

研究テーマ名 人の幸せ 地域の幸福

人の幸せ 地域の幸福

1. 社会課題とチーム1の問い

少子高齢化は、日本において長らくの間、社会問題として顕著に取り上げられ、人口減少や労働力不足、社会保障制度の維持に大きな影響を及ぼしている。高知県においても、大幅な人口減少が予測されており、この問題に対して、人口増加を促進し、少子高齢化を緩和する方策が求められている。しかし、衰退を免れない地域も存在することが予測される中で、単に地域を閉じることは、あまりにも悲観的である。もし地域が衰退し閉じることを選択する場合、何があれば住民が「幸せだ」と感じ、その閉鎖を受け入れることができるのか。この問いを基に、私たちは方策を考察した。

2. 活動を通して

2.1 高知県の課題意識

現地調査を通じて明らかになったのは、地域の魅力発信が十分でないこと、魅力的な仕事が不足していること、過疎化に対する不安が広がっていることなどで、ネガティブな側面が多く見受けられた。一方で、生活の不便さを感じない、また、伝統や地域に対する思いを大切にしている住民が多いといったポジティブな側面も存在した。地域の衰退や消滅、担い手不足に対して危機感を持ちながらも、地域に対する誇りや愛着を感じている住民が多いことが分かった。

2.2 現状の政策と課題

高知県の政策は、「若者を増やす」「くらしを支える」「活力を生む」「仕事を生み出す」といった方針を掲げている。しかし、自治体ごとに政策方針が異なるため、その実効性に差が見られる。また、スマートシリングなどの施策も考慮されているが、これらはあくまで公共サービスの範囲にとどまっている。

すべての地域で人口が増加するわけではないため、最終的に閉鎖を選ばざるを得ない地域も出てくると予測される。地域が閉じるという現実に向き合い、どのような形で閉じていくかを考える必要がある。

2.3 私たちが理想とする社会

私たちが描く理想の社会像は、以下の三つの要素が融合した社会である。「ファンがたくさんいる“く”街」「挑戦する人、巻き込まれる人、応援する人が笑える街」「閉じていく地域があるなら、その地域が幸せに閉じていける社会」。最初の二つは行政や地域おこし協力隊などの施策で取り組まれているが、三つ目の「閉じていく地域があるなら、その地域が幸せに閉じていける社会」に関する取り組みは不足している。この点において、私たちは具体的な方策を提案する。

2.4 提案

「閉じていく地域があるなら、その地域が幸せに閉じていける社会」を実現するためには、地域に「生きた形跡」を残すことが必要だと考えた。物理的な遺物として地域の記録を残すことにより、後世にその地域を回顧する手段を提供でき、地域に対する魅力の再認識と発信にも繋がると考えた。これを実現するために、私たちは「みちかけ」というサービスを提案する。このサービスは、地域に住んでいる人々や訪れた人々が、写真や思い出などを形式にとらわれず自由に投稿し、電子データとして保存できるプラットフォームである。利用者はその記録をいつでも振り返ることができ、また他の人々の記録も閲覧可能である。このサービスは、回想を促すだけでなく、地域への誇りや愛着を深めるきっかけとなり得る。

3. まとめ・展望

私たちが理想とする社会を実現するためには、まず地元の魅力を再確認し、それを外部に発信しつつ、地域の記録を保存していくことが重要であると結論した。さらに、住民に回想のきっかけを提供することが、その地域に対する誇りを育むことに繋がる。また、地域の活性化を図る施策も必要ではあるが、同時に「地域が閉じる」という現実にも正面から向き合っていく必要がある。「人口減少」を単なるネガティブな要素として捉えるのではなく、社会の移り変わりを幸せな形で迎えるための具体的な取り組みを進めていきたいと考える。

以上

「チーム論述書」様式

チーム番号 (2)

研究テーマ名 _____ 誰もが自分の“幸せのカチ”を大切にできる未来に向けて

自分らしい幸せを求めるクエスト：多様性を活かす新しい生き方

現代社会において、幸福の定義の多様化が進み、個人の価値観と社会全体の幸福のバランスが課題となっている。高知県では、人口減少や伝統文化の希薄化が進む中、新たな幸福の形を模索する必要がある。本研究では、「誰もが自分の“幸せのカチ”を大切にできる未来へ向けて、何ができるか」という問いを設定し、高知県をモデルケースとした新しい幸福追求のプラットフォーム“おらくえすと(以下：おらくえ)”の提案を行った。

1 幸せの再定義と現代社会の課題

1.1 幸せの多様性と現代社会のジレンマ

現代社会では、幸せの定義が多様化しつつあり、幸福は主観的であるからこそ、そこに人々の価値観や人生観が投影される¹⁾。経済的安定と心の豊かさの両立、社会とのつながりが生み出す充実感など、“幸せのカチ”は個人によって異なる。一方で、現代社会では変化への適応困難や未来への不安、社会的孤立と居場所の喪失、地域間交流の減少と伝統文化の希薄化といった課題が顕在化している。

1.2 幸せの再発見と新たなビジョン

これらの課題に対応するため、幸せの意味を問い直し、自分らしい豊かさのカチを見つける必要がある。地域特性を活かした幸福の形態を模索し、多様な在り方を認め合える社会を構想することが重要である。また、地域資源を活用した幸せの再構築や、個人と社会をつなぐプラットフォームの可能性を探ること、多様な“幸せのカチ”が共存しうる社会の実現が期待される。

2 おらくえ：多様な“幸せのカチ”を実現するプラットフォーム

2.1 “おらくえ”プラットフォームの背景と目的

高知県の地域特性を活かし、「不便を楽しむ」哲学を応用した新しいアプローチとして“おらくえ”を提案する。このプラットフォームは、多様な“幸せのカチ”の実現と融合を目指している。おらくえは、「不便を楽しむ」哲学に基づき、身近な幸せの再発見および多様性への配慮などを目的としている。

2.2 おらくえの特徴と社会課題へのアプローチ

“おらくえ”は、高知県独自の地域特性を活かした「人生の寄り道」要素やユーザー主導型の課題解決システム、コミュニティの形成を促す機能など、多彩な特徴を持っている。これらにより、地域間交流や多様な“幸せのカチ”を尊重することが可能となる。また、ゲーム要素を取り入れることで地域住民らがその土地の課題解決に参加できる仕組みが構築されており、個人と地域社会の新たな関係性の創造を目指す。

3 “おらくえ”で実現したい未来

今後は“おらくえ”の実地検証を行い、多様なクエストの調整や、挑戦者と依頼者との合意形成の複雑性などの課題を克服する。

“おらくえ”を通じ地域社会の課題を解決すると同時に個人が“幸せのカチ”を見つけるきっかけとなる体験を提供することで、身近な幸せに気付くことができ多様な“幸せのカチ”が共存する世界を目指す。

【引用文献】

1) 文化的幸福観-文化心理学的知見と将来への展望-, 内田 由紀子, 荻原 裕二, Japanese Psychological Review, 2012, 55, pp. 26-42.

公式 HP



公式 LINE



「チーム論述書」

チーム番号（ 3 ）

研究テーマ名 自分探しを実現するサービス「ここたび」について

自分探しを実現するサービス「ここたび」について

1. 背景・目的

高知県では人口減少や地域活力の低下が課題となっており、県民一人ひとりが生き生きと生活する環境の構築が求められる。私たちは、県民が「やりたいこと」を発見し、それを実現できる仕組みを作ることで、個々の幸福感を高め、地域全体を活性化させることを目指した。特に、幸福感を構成する要素として心理学者マーティン・セリグマンが提唱した PERMA の法則（ポジティブな感情、没頭、人間関係、意味、達成感）に着目し、これを軸とした支援策を検討した。

2. 検討内容と考察

インタビューや文献調査を通じて、県民の現状を把握した結果、以下の課題が明らかになった。

1. 探索者（やりたいことを探している人）が情報不足や行動への心理的ハードルを抱えている。
2. 実現希望者（やりたいことを見つけたが行動できない人）が仲間や支援を得られていない。
3. 実現者（活動を行っている人）が活動を広げるための手段や参加者の不足を感じている。

これらの課題を踏まえ、特に「探索者」に焦点を当てることで、やりたいことの発見から行動までの支援を行い、他の対象者への波及効果も期待できると考えた。

3. 施策の検討とプロトタイプ

3.1 施策の概要

施策の中心として、自己理解から行動までを一貫して支援するポータルサイトを開発した。自己分析機能で興味や強みを把握し、イベント紹介・検索機能で地域活動の情報を提供する。また、仲間募集・交流機能によりつながりを促進し、実績の可視化機能で行動や成果を確認できる仕組みを整えた。地域の祭りやオフラインイベントとも連携し、探索者が心理的・時間的なハードルを感じずに参加しやすい環境を構築した。

3.2 オフライン施策の連携

オンライン施策に加えて、地域の祭りや趣味の教室、専門家紹介イベントなど、オフライン活動の場も提供する。これにより、探索者が心理的・時間的ハードルを感じることなく気軽に参加できる環境を整える。

4. プロトタイプ検証

4.1 プロトタイプの構築

本研究では、探索者を主な対象としたポータルサイトのプロトタイプを試作し、その有効性を検証した。プロトタイプには、自己分析機能、イベント検索機能、交流機能などの主要な支援ツールを搭載し、探索者が「やりたいこと」を発見し、行動に移すプロセスをサポートできる設計を実現した。

4.2 プロトタイプの検証

探索者、実現者の方々を対象にインタビューの形式でプロトタイプの検証を行った。プロトタイプ検証では、利用者から「活動やイベントの情報が得られる点」「やりたいことが決まっていな人が探すきっかけになる点」「対象層が明確で若者を呼び込める可能性」などが評価される結果となった。一方で、カテゴリー別の宣伝方法、スクリーニング機能の追加、「誰と」を重視した情報提供の強化などが改善点として挙げられた。

5. まとめ

本研究では、高知県民の「やりたいこと」の発見・実現を支援するため、ポータルサイト構築とオフライン施策の連携を検討した。プロトタイプ検証で一定の成果を確認した一方、改善点も明らかとなった。今後は、利用者のフィードバックを基にサイトの完成度を高めるとともに、地域活動との連携を強化することで、より効果的な支援を実現していきたい。これにより、県民のウェルビーイングを持続的に向上させる仕組みを目指す。

